

デジタルアーカイブにおける知の増殖型サイクルの実証的研究

—鎌倉芳太郎資料における知の増殖型サイクルへの適用への課題—

久世 均^{*1}, 富川 晶世^{*2}

沖縄戦では多くの文化資源が戦火に消え、首里城関係資料も多く消失した。そのために、首里城復元の際の資料収集は困難を極めたが、鎌倉芳太郎が残した資料が首里城復元に大きな役割を果たした。それは、鎌倉芳太郎が戦前に行った沖縄に関する調査記録や収集資料が、戦火を逃れ保存されていたということに尽きる。鎌倉芳太郎は沖縄で撮影したガラス乾板を自身の避難先である防空壕で保管していたという。これら保存されていた資料が、首里城復元において大きな役割を果たしたという事実は、「知の増殖型サイクル」の考え方に当てはめることができる。首里城復元の際に利用された鎌倉資料は原資料であり、現在鎌倉芳太郎資料画像データベースとしてデジタルアーカイブされている。この鎌倉資料が、首里城復元の際に利用された貴重な資料として「知の増殖型サイクル」に適応することができると考え、今後の鎌倉資料の利活用への課題も含め報告する。

<キーワード>デジタルアーカイブ, 知の増殖型サイクル, 鎌倉芳太郎資料, 首里城復元

1. はじめに

情報社会の現代、あらゆる情報がデジタルアーカイブとして保存・提供され、沖縄関係のデジタルアーカイブも多く作成されるようになった。人文系データベース協議会が運営している「人文系データベース構築事例のポータルサイト・データベース」よりDB名称欄に「沖縄」と入力して検索すると「82件」ものデータベースにヒットする(2017年5月28日現在)¹⁾。

しかし、その中には運用停止やリンク切れになっているデータベースも多数存在し、有用なデジタルアーカイブが継続的に運用できていない状況がある。

運用停止に至る理由はさまざまであろうが、継続的運用にはデジタルアーカイブの利活用が重要になる。また、デジタルアーカイブの継続的運用を行うためには、デジタルアーカイブの活用実態と効果を検証する必要があると考える。デジタルアーカイブの活用という

アウトプットだけでなく、デジタルアーカイブの効果(何が創造されたか)の知の創造が必要である。

本稿では、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵の「鎌倉芳太郎資料」における「知の増殖型サイクル」の実証的研究を行ったので報告する。¹⁾

2. 鎌倉芳太郎と「鎌倉芳太郎資料」

鎌倉芳太郎(1898[明治 31]年～1983[昭和 58]年)は、香川県氷上村(現三木町)に生まれた。1918(大正 7)年東京美術学校図画師範科に入学し、1921(大正 10)年に卒業、4月より沖縄女子師範学校の教師として赴任した。「琉球芸術」に魅せられた鎌倉氏は帰京後も琉球芸術研究を継続し、首里城取り壊しの動きを止める働きかけなど、琉球文化の保存に努め調査研究の発信に取り組んだ。戦後は、美術研究者として大学などで教鞭をとりながら、1973(昭和 48)年「型絵染」の重要無形文化財

*1 KUZE, Hitoshi 岐阜女子大学 *2 TOMIKAWA, Akiyo 沖縄県立図書館

保持者(人間国宝)に認定された)。

鎌倉芳太郎が、1921(大正 10)年 4 月から 1937(昭和 12)年 1 月までの沖縄調査の折に沖縄現地で収集した琉球・沖縄芸術関係資料の大部分が沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館に収蔵されている。その資料の全体数は、重要文化財に指定されたガラス乾板 1,229 点・台紙付紙焼き写真 851 点・調査ノート 81 点を筆頭に、写真資料(紙焼き写真)2,952 点、文書資料(現行・筆写本・他)178 点、紅型資料(型紙・他)2,154 点、陶磁器資料 67 点で、その総数は 7,512 点になる。これらの資料を総称して「鎌倉芳太郎資料」(以下「鎌倉資料」と略称)と呼んでいる。

「鎌倉資料」の中でよく知られている資料の一つに「御後(おご)絵(え)」がある。「御後絵」とは琉球国王の肖像画のことである。国王の死後描かれ、王家の菩提寺である円覚寺(えんかくじ)と中城(なかぐすく)御殿(うどうん)に保管された。一般の目にふれることはなく、年に一度の虫干しの際に王家関係者が見ることができた。その御後絵を鎌倉芳太郎は中城御殿にて 11 点撮影している。その後沖縄戦により消失したため、現存する御後絵は確認されていない。現在に伝えるのは、鎌倉芳太郎が撮影した画像のみである。

鎌倉芳太郎が撮影した御後絵はモノクロ写真のため、実際の御後絵の「色」は不明である。しかし最近その御後絵の色彩研究が行われ、復元作業が進められている。首里城公園では、2014 年に「十八代尚育(しょういく)王(おう)」、2017 年に「十七代尚灝(しょうこう)王(おう)」の御後絵を復元し公開している。

3. 鎌倉芳太郎と首里城

鎌倉芳太郎は「一度ならず二度までも、しかも重大な局面で首里城と深くかかわっている」。一度目は、1924(大正 13)年、首里城取り壊しの動きを止める働きかけである。首里城正殿を取

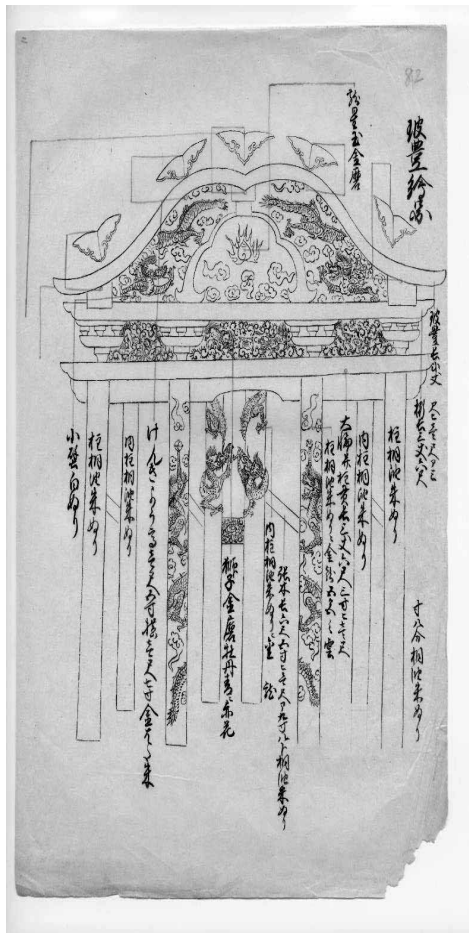


図 1 百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記(破豊絵図)

り壊し沖縄県社社殿(神社)が建設される計画を新聞記事で知った鎌倉芳太郎は、東京帝国大学の伊東忠太(建築家であり、天皇を補佐する平田東助内大臣の甥)に首里城の危機を伝えた。このことにより、伊東忠太の内務省への首里城取り壊し中止要請により、首里城の取り壊しは中止となる。

二度目は沖縄戦で消失した首里城復元の際の「鎌倉資料」の活用である。沖縄戦によって貴重な資料が消失し復元の根拠となる資料収集は困難を極めたが、図 1 「百(もも)浦(うら)添(そえ)御(う)殿(どうん)普(ふ)請(しん)付(につき)御(み)絵(え)図(ず)并(ならびに)御(ご)材(ざい)木(もく)寸(すん)法(ほう)記(き)」等の「鎌

倉資料」が、首里城復元に大きな役割を果たした。

沖縄戦で破壊された首里城の復元は、1958(昭和33)年の「守礼門復元修理工事」の竣工にはじまり現在まで続く一大事業である。都市公園事業としてスタートしたのは1986(昭和61)年、本土復帰20周年である1992(平成4)年中の開園を目指していた。首里城の復元については角南勇二氏(沖縄開発庁沖縄総合事務局)が次のように述べている。

「復元に当たっては、できるだけ往時の姿に

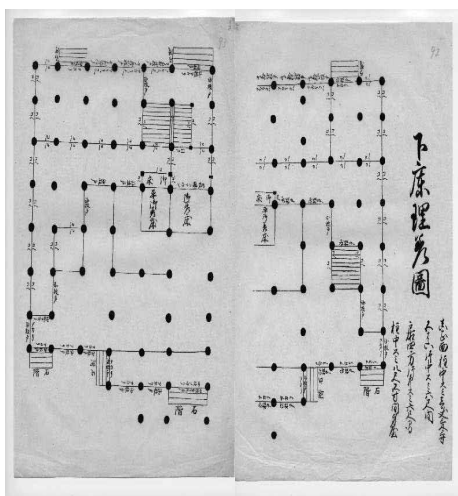


図2 百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記
(下庫理差図)

近づけることが求められた。このため設計に先だって遺構の詳細な調査、文献資料の収集・解析、国内外の類似事例の調査、戦前の首里城を知っている人達からの聞き取り調査など厳密な復元のための調査が短期間の間に精力的に実施された。」

文献資料調査については、首里城に関わる文献資料が、戦火により多くが消失または散逸していたため収集は困難を極めたが、結果的には非常に貴重な資料を数多く見つけることができた。

なかでも、沖縄県立芸術大学から見つかった

図2の「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」はそれまでの資料の空白を埋める極めて重要な資料であった。

そのほか、同じく鎌倉コレクションの中から見つかった1, 200枚に及ぶ写真乾板や、戦前正殿の修理に携わった文部省の森政三氏や板谷良之進氏などの資料の中には、既存の出版物に掲載された写真以外の、今は見ることでできない戦前の首里城の写真を数多く見出すことができた。これらの写真は引き伸ばされて図面からは読み取れない細部の検討に大いに役立つ。

以上より、首里城復元には鎌倉資料が大きな役割を果たしたことが分かる。首里城復元における鎌倉資料の役割が示されたその他の記述を以下に示す。

首里城正殿に関して、琉球王朝期における再建に際し記された古記録(『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』等)の精緻な筆写は、建築仕様、材料、装飾並びに正殿で行われた祭事・政事・に関わる儀礼を今に伝えるもので、今回の首里城復元に参考となる最も重要な資料である。

復元の有効な資料である「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」などの古文書や古写真の殆どは、大正十年から沖縄に教師として赴任された鎌倉芳太郎氏が撮影あるいは収集されたものである。鎌倉氏は、公務のかたわら沖縄の文化財に興味を持たれて、古文書類をノートに書き残し、首里城をはじめとした遺跡の写真が撮られた。古文書の中には既に実物はなく、このノートに記されているものしか残っていないものもあり、また、写真はルーペで拡大しても建物の詳細が判別できるほど精緻なものであった。

正殿の復元資料の中で最も重要な資料である『百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記』(1768年)、この古文書を補足する鎌倉芳太郎氏(1768年)が書き写した同じ表題のノート、首里城や王府の関連施設で執り行われる儀式時のレイアウト

トを示す図4の『図帳[勢頭方(シードゥホウ)]』(1839年)と図5に示す『図帳[当方(アタイホウ)]』がいずれも沖縄県立芸術大学の鎌倉芳太郎コレクションの中から見つかった。

また、高良倉吉氏は『首里城関係資料集』(沖縄開発庁沖縄総合事務局開発建設部編。1987, p. 2-7)の「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」の項にて次のように述べている。

「形式上は重修工事完了報告書の一部、内容としては重修工事の仕様書たる本史料は、現時点では他に類例を見ない正殿に関する一級史料といえよう。正殿各部を具体的に把握できるという点でもそうであるが、何よりも、正殿内の間仕切り、部屋割りを正確に捉えうる唯一の資料であるという点で、特筆すべき位置を占めるものである。正殿の復元はこの資料なしには不可能である、といっても過言ではないほどの価値をもつ。」

首里城復元において特に重要だったと言われる「鎌倉資料」の、「百(もも)浦(うら)添(そえ)御(う)殿(どうん)普(ふ)請(しん)付(につき)御(み)絵(え)図(ず)并(ならびに)御(ご)材(ざい)木(もく)寸(すん)法(ぼう)記(き)」, 「図帳[勢頭方(シードゥホウ)]」, 「図帳[当方(アタイホウ)]」の一部を図1～4に示す。

「百浦添御殿普請付御絵図并御材木寸法記」とは、正殿(百浦添御殿)の重修記録の一部として、1768(乾隆33年)年10月18日付で作成された文

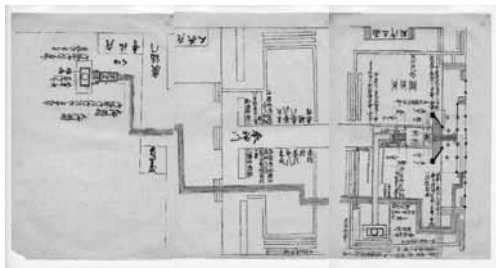


図3 図帳[勢頭方]([御座構之図])
(沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵)

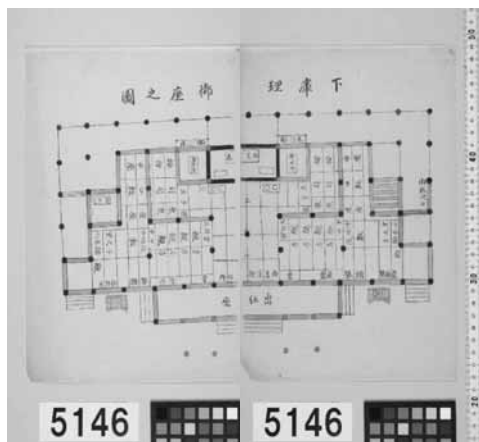


図4 図帳[当方](下庫理御座之図)
(沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵)

書で、正殿建築を絵図として書き込み文字で表現した「御絵図」、正殿建築の各部使用材料の詳細を記した「御材木寸法記」の二つで構成される。「御絵図」は原本の形で、「御材木寸法記」は鎌倉芳太郎が1927(昭和2)年に尚家沖縄屋敷で書き写したノートの形で残されている。

「図帳[勢頭方(シードゥホウ)]」とは、場内外の王府関連の施設で執り行われた諸儀式の際、各官職の着座位置や諸道具の配置などが絵図と添えられた文章で解説されたものである。首里城をはじめとする関連施設の建築的な間取りと、それらの施設が儀式の際にどのように使われていたかを知ることができる。「勢頭方(シードゥホウ)」とは、王政府行政機構の一つ「御双紙庫理」に属する部署で、警備を担当する部署と考えられている。

「図帳[当方(アタイホウ)]」とは、前述の「図帳[勢頭方(シードゥホウ)]」とほぼ同様の絵図であるが、「御双紙庫理」に属するもう一つの部署である「当方(アタイホウ)」のハンドブック・マニュアル的な位置を占める文書である。「当方(アタイホウ)」とは、イベントの進行係といった性格の部署であったと考えられている。



図5 首里城 正殿 正面
(沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館所蔵)

4. 首里城復元と鎌倉芳太郎資料における「知の増殖型サイクル」への適用

沖縄戦では多くの文化資源が戦火に消え、首里城関係資料も多く消失した。前節で述べたように、首里城復元の際の資料収集は困難を極めたが、鎌倉芳太郎が残した資料が首里城復元に大きな役割を果たした。それは、鎌倉芳太郎が戦前に行った沖縄に関する調査記録や収集資料が、戦火を逃れ保存されていたということに尽きる。鎌倉芳太郎は沖縄で撮影したガラス乾板を自身の避難先である防空壕で保管していたという。これら保存されていた資料が、首里城復元において大きな役割を果たしたという事実は、「知の増殖型サイクル」の考え方に当てはめることができる。

首里城復元の際に利用された鎌倉資料は原資料であり、デジタルアーカイブではない。しかし、「知の増殖型サイクル」に適応することで、これからのデジタルアーカイブの在り方が見えてくる。首里城復元と鎌倉資料を「知の増殖型サイクル」に適応したものを図7に示す。

戦火を逃れ保存されていた鎌倉資料により、琉球王国時代の首里城をより忠実に復元することができた。それは新たな文化資源、観光資源となった。那覇市が2016年に行った観光地

訪問率の調査結果からも分かるように、那覇市を訪れる6割の観光客が訪れる首里城は、沖縄県の新たな観光資源となり観光客の増加を促す一つの要因となっていると言える。観光客の増加とともに沖縄県経済が活性化し、新たな産業が生み出されるその構図は「知の増殖型サイクル」の基となった「知的創造サイクル」の構造そのものと言える。また、「御後絵」の色彩研究や復元等も含め、首里城関連研究は現在も続いており、それは新たな知の創造となり「首里城関係資料」として次の世代へ伝承されることとなる。

これは、これからのデジタルアーカイブの在り方を示す一つの手立てとなる。以上の図に示した「鎌倉芳太郎資料」を含む「首里城関係資料」が、戦火を逃れ保存されていたことにより、首里城復元を成し遂げることができた。これからのデジタルアーカイブでも、原資料はもちろんデジタル化した2次資料の保存が重要となる。

資料の「保存」をアーカイブプロセスに組み込んだ上で、図に示した「知の増殖型サイクル」の考え方を適応することにより、知を増殖させ循環させることができる。

現在、首里城復元のプロセスについては、沖縄美ら島財団において、首里城復元のプロセスを冊子「首里城研究」において報告している。今後、これらの研究誌ならびに論文等を鎌倉資料に追加し、資料が増殖するサイクルを確立することが課題となる。

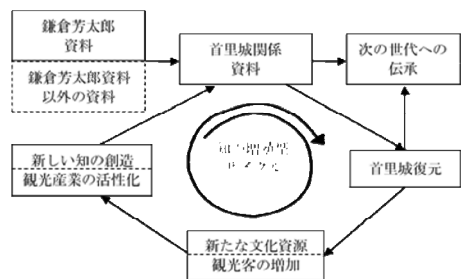


図6 首里城復元における知の増殖型システム

5. おわりに

鎌倉芳太郎資料が、首里城復元において大きな役割を果たしたという事実を、「知の増殖型サイクル」に適用することで、首里城の復元における鎌倉芳太郎資料を「知の増殖型サイクル」を用いた効果検証を行った。今後は、鎌倉芳太郎資料については成果物の利活用調査を、「知の増殖型サイクル」を用いた検証をそれぞれもう少し掘り下げて研究していく予定である。

また、沖縄関係デジタルアーカイブは多種多様な広がりを見せており、他のデジタルアーカイブでも検証してみる必要があると考える。

- (6) 富川晶世：デジタルアーカイブにおける知の増殖型サイクルの実証的研究 平成30年岐阜女子大学修士論文（主査：久世均）

引用・参考文献

- (1) 久世均：飛騨高山匠の技デジタルアーカイブに関する効果測定モデルの実践的研究 岐阜女子大学デジタルアーカイブ研究所テクニカルレポート 2017 Vol.2 No.2
.2017.3.25
- (2) “人文系データベース構築事例のポータルサイト・データベース”. 人文系データベース協議会.
<http://www.jinbun-db.com/database>(参照2017-5-28)
- (3) 謝花佐和子, 仲里なぎさ: 麗しき琉球の記憶—鎌倉芳太郎が発見した美—. 沖縄文化の杜, 2014, 170p., ISBN:978-4-904274-19-4
- (4) 波照間永吉.“鎌倉芳太郎資料の公開に寄せて”. 鎌倉芳太郎資料データベース.
2014.<http://www.ken.okigei.ac.jp/kamakura/>, (参照2017-5-24)
- (5) “鎌倉芳太郎資料画像総合データベースにもとづく発展的研究”. 科学研究費助成事業データベース.
2016-04-25.<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-23520179/>, (参照2017-5-24)